

木質構造研究会 40 周年記念特集号の編集にあたって

1981年に創設された木質構造研究会は、本年2021年で満40周年を迎えるとともに、機関紙“Journal of Timber Engineering”も今号で150号となりました。奇しくも、2011年の木質構造研究会30周年記念特集号はJTE 100号記念と重なっており、途中で年間発行冊数の変更があった影響で、ちょうど良いタイミングでの発行となりました。40年の長きにわたり研究会を支えて頂いた会員の皆様に、まずは御礼申し上げます。

この10年を振り返ってみますと、2011年の東日本大震災に始まり、2014年の広島県の豪雨による土砂災害、2016年の熊本地震、2019年の台風19号による東日本各地での洪水被害等々、毎年のように大きな自然災害が発生し、木造建築物も甚大な被害を受けました。一方で、2010年の「公共建築物等木材利用促進法」の公布・施行の影響もあり、木造建築物は住宅から非住宅へとその対象を拡げ、CLTを代表とする新しい木質材料の開発やそれを用いた高強度部材の開発等が一気に進みました。ここ数年は当たり前のように木造の大型施設が建設されていますが、このような未来が本当に来ることになるとは、10年前の時点ではもちろん想像できていませんでした。

このように大きな変化を遂げたこの10年を振り返りつつ、この先の未来を予測する意味も込めて、本特集号では会員の皆様にご寄稿頂くことを企画いたしました。執筆テーマは以下のように3つの区分を設けさせていただきました。

- ①この10年の木質構造の進展を振り返って（材料、工法、加工、施工、教育等における進化の記憶と記録）
- ②これからの木質構造はどうなっていくのか（10年後、20年後の木質構造の姿は？）
- ③その他（自由テーマ：研究会での思い出、研究会に期待すること、最近気になること 等々）

最終的に116名の皆様に執筆いただき、非常に読み応えのある特集号に仕上がったと感じております。お忙しい中、執筆にご協力いただきました皆様に改めて御礼申し上げます。

なお、賛助会員、企業・団体会員の皆様には1社1編に限らせていただきましたが、編集委員会メンバーに関してはその範囲外で執筆をお願いしました。また、会長・元会長は1ページ、その他の方々は1/2ページとさせていただきます。頂いた原稿は編集委員会の独断で順番等を決めさせていただきました。

本特集号を区切りとして、木質構造研究会が次の10年に向けて更に発展していけるよう、引き続き会員各位のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

2021年6月吉日

Journal of Timber Engineering 編集委員会

木質構造研究会 編集委員

青木 謙治	秋山 信彦	井道 裕史	梅村啓志郎	大浦和香子	落合 陽	河原 大
木本 勢也	清水 庸介	相馬 智明	谷川 信江	中島 洋	長島 泰介	福山 弘

